遅子建の中の魚

土屋 肇枝

1．はじめに

遅子建は一九八五年『北方文学』一期に掲載された「那丢失的‥‥」で文壇にデビューし、若手の中では期待のかかる女性作家である。ロシアとの国境にある小さな村に生まれ、地元の大学を卒業後北京の魯迅文学院で学び、現在ハルピンを拠点に創作活動をしている。これまで長短篇合わせて八十数篇にのぼる小説を発表してきたが、デビュー当時から現在まで〈北方性〉と〈女性性〉という二つの顕著な特徴を持ち続けている。戴錦華の「极地之女」*1 と題する遅子建論は作品の持つ女性性に関する考察だが、その表題は遅子建の二つの特長を簡潔に提示しているといえよう。

遅子建の生い立ちに多く由来する北方性*2 は、論者が必ず指摘する特徴であり、また幾つかの興味深い可能性を持っているが、ここでは「极地之女」で初めて正面から論じられることになったもう一つの特徴である女性性について考えていきたい。遅子建の小説を読めば、主人公のほとんどが女性であり、女性たちの生きる姿が繰り返し描かれ、しかも徐々に変化を見せている点に注目しないわけにはいかないからである。

以下、遅子建の作品内で女性性を担う多くのモティーフのうち〈魚〉に注目し、この〈魚〉のモティーフがどのように女性性を表現し、また表現の可能性を広げているかを見ていきたい。

2．作品での魚の現れ方

遅子建の小説には、〈魚〉が登場人物名*3——严鱼、鱼儿、鱼纹——や地名*4——大固其固、鱼塔镇——として使われたり、「鱼骨」、「逝川」、「白银那」、さらに「原始风景」の一章「渔汛」のように漁がストーリーの中心になっている作品がある。魚のモティーフとなればさらに多くの作品にその記述を見ることができるし、〈泪鱼〉という魅力的な魚を創出したことからも彼女の魚によせる関心の深さが感じとれる。

魚に関する記述といってもいろいろなものがある。自然界での魚の営み、魚そのものの姿や動作、漁の様子や店で売られる魚など、列挙しきれない。ただ、描写される対象によっていくつかに分類することができそうである。一つは生物としての魚に関するもの、二つは漁に関するもの、三つは魚を用いた形容表現、四つは夢や想念に現れる魚である。それ

らをいささか煩雑にはなるが、分類ごとに例示してみる。

① 生物としての魚の記述

魚たちはあらゆる困難を乗り越えて卵を産み、次の年の春稚魚になって、狭い呼玛河から黒龙江に泳いでゆき、オホーツク海の広い懐に入って育まれ大きくなっていくのだ。(沈)*5

泪魚は逝川にだけいる魚である。姿は平べったく、赤い鰭に、青い鱗だ。毎年初雪のあとにだけ現れ、それらが来たときは逝川中がウォーウォーという音を発する。この魚は捕まえると必ず二つの目から玉のような涙を流し、赤黒い尾鰭をぱたぱたと動かす。‥‥(中略)‥‥このとき女たちは手際よく夫の捕まえた泪魚を桶に入れ、魚をなだめ、何度も祈るように言うのだ。「もう泣かないで、もう泣かないで、もう泣かないで‥‥」すると、逝川からすくい揚げられた泪魚は泣かなくなるのだ。(逝)

② 漁に関する記述

サケ漁の時期、美奴はいつも船を見に川岸へ行った。‥‥(中略)‥‥美奴が船を見るのは、実は船の収穫を見るためである。どこの家が大漁でどこの家がさっぱり駄目か。美奴には岸から一目で船主の表情が判る。魚が揚がった人の表情はおだやかで、少しも揚がらなかった人は苦い顔を隠しきれず、大漁だった人は必ず顔いっぱいに笑みを浮かべている。(岸)

まもなく、その男によって網が水の中から引き上げられ、網に掛かったいっぱいの生き生きした魚を目にした。それらはたちまち男の手で飛ぶように籠にかきいれられ、魚の匂いが泉の水のように澄み切った香りを帯びて渦巻いた。籠は魚がもがくために揺れ動き、いかにも最後の抵抗のようであった。(炉)

③ 魚を用いた形容表現

彼女の涙が稚魚のように柔らかく手の上に滑り落ちた。(岸)

美奴は自分の羞恥心が人に鵜呑みにされているのをジリジリと感じた。さっき岸に上げられたあれらの雌サケが鋭い刃物で腹を割かれたように。(岸)

白银那は一匹の巨大な魚に変わってしまい、一日中生臭いにおいが充満していた。

（白）

④　夢や想念に現れる魚の記述

私はかがみ、針に黒魚がかかっているかどうか竿を引いて見てみようと思った。もしかかってなくても、あの黄金色の餌がまだあるかどうか。私が釣り竿に手を伸ばしたそのとき、夢を引き裂く例のノックの音が乱暴に響いた。（九）

彼女はまた白石文の授業で居眠りをした。そしてまた一匹の魚の夢を見た。ただこの魚は極めてすばしっこく、エンドウ豆の鞘ほどの大きさで、美奴が浅瀬でそれを捕まえようとすると、いつも彼女の指の隙間から逃げてしまうのである。（岸）

これらの分類を使って小説の魚に関する記述を整理してみると、②の漁に関する記述と③の魚を用いた形容表現は多くの小説に広く見られるのに対し、①の生物としての魚の記述と④の夢や想念に現れる魚の記述は一作品中に共存することがほとんどない。しかもこの相容れない二種類の記述は、それぞれが小説の雰囲気を決定する大きな要素になっているように思われる。①の生物としての魚の記述が見られる小説の場合、穏やかで故事的な作風になり農村が舞台になることが多いが、④の夢や想念に現れる魚の記述が見られる小説の場合は、観念的で緊迫感があり都市を舞台とすることが多い。魚の記述の種類と小説の作風が対応しているということは、これらの記述が小説の主題にも深く関わっている、ということではないだろうか。〈現実の魚〉と〈空想の魚〉とでも名づけることのできる①と④二つの魚の記述あるいはモティーフと小説の主題の関わりを、以下で見ていきたい。

３．〈現実の魚〉と女

まず、量的には圧倒的に多い〈現実の魚〉を検討する上で、魚あるいは漁をストーリーの中心とする作品群――「鱼骨」1988、「原始风景・渔汛」1990、「逝川」1994、「白银那」1996――を軸にして考えると整理しやすいと思われる。というのも、それぞれ発表時期がばらついているにもかかわらず、そこに現れる魚のモティーフには変奏曲のように共通する主題が流れていると思えるからである。

これらの小説は、みな女性が主役であり、彼女たちがストーリーを動かしていく。「鱼骨」では旗旗大嫂、「逝川」では吉喜、「渔汛」では鱼儿、「白银那」では古修竹と卡佳である。しかも作品における彼女たちの設定はとても興味深い。旗旗大嫂は子供ができないために夫に逃げられ石女といわれている。吉喜は才色兼備が災いして男たちに敬遠され、結婚し

ないまま年老いた産婆である。魚儿は不実な夫の元から身ごもったまま実家に戻ってくる。古修竹は恋人を亡くしてからずっと一人身でいる教師。男勝りで姉さん女房の卡佳はよき母よき妻だが不慮の死を遂げる。彼女たちに与えられている設定はいずれも結婚や出産と密接に結びついており、結婚出産を原点とする座標上に――正軸上には魚儿と卡佳が、負軸上には旗旗大嫂と吉喜と古修竹が――おのおの配されているのだ。しかし、もしこのような設定だけなら遅子建以外の作家にもあるだろうが、彼女の特色はその座標にもう一つ、漁における魚の収穫の有無が重ねられる点にある。

旗旗大嫂は山積みになった魚の骨を見て河に魚が来ていると勘違いし、漁に出たものの徒労に終わる。産婆の吉喜はお産のために漁に出られず、明け方に網を打ってはみたが一匹もかからない。古修竹は町から来たインテリで、漁を見るのも初めてなら魚を捕ったこともない。一方、魚儿は河畔に育ち漁は手慣れたもので、捕った魚が結婚のきっかけになるし、卡佳は漁でも男顔負けの収穫を上げ、おまけに誰もが手をこまねいて見ていた魚の腐敗を、誰も思いつかなかった方法で防ごうとする。二つの座標を重ねると、魚潮の到来する漁期に魚を捕れなかった者は出産あるいは結婚からも遠ざかっており、漁期に魚を捕れる者は妊娠したり子供を得ている。とすれば、魚の押しよせる魚潮が懐胎に、そして漁が出産に重なる構図が遅子建の魚のモティーフにあるといえるのではないだろうか。

類似の構図は、魚や漁をストーリーの中心としないほかの作品にも見られる。たとえば「原野上的羊群」の冒頭、

> その船はさっきより私たちに近づいた。彼らはせわしげに網を引き揚げ始めた。網と水の色は同じでくすみ古ぼけている。キラキラ光る魚の鱗は見あたらず、彼らの収穫はなにもなかった。「魚一匹かからなかったらしい」と私は言った。

という記述のあと、その様子を眺めていた主人公が実は子供に恵まれず養子をもらいに行くというくだりが続く。また、魚をかすめ取った飼い猫が孕んだのではと疑う「遥渡相思」*6の主人公得豆の疑念もこの構図のバリエーションに数えることができるかもしれない。

さらに、このような遅子建の魚のモティーフに見られる構図と切り離せないものが〈川〉である。黒龍江、呼玛河、逝川、そして名前は明らかにされない多くの川が、岸辺の人々に魚潮をもたらし、彼らの人生に深く関わっている。彼らは魚潮の予感を川の胎動のように感じ、「わしらのこの川が身ごもったんだよ！(魚)」と語る。魚潮が到来するときは「その数日間、昼も夜も川から目が離せない。さながら、出産間近の妊婦が産みの苦しみをなめているために多くの親戚がつきっきりなのと同じだ。(原)」といい、「だが十数年後、この川は女が盛りを過ぎたようにもう子供を産まなくなった。(魚)」と語る。彼らにとって川は母胎のように感じ取られている。

だが、遅子建の小説に描かれる〈川〉をより広く見てみると、「多くの女性たちに力い

っぱい子供たちを産み落とさせる川の流れ(懐)」といわれるような生命を生み出す存在だけではなく、生命の戻っていく場所としても描かれている。たとえば「白銀那」では、「人がもし氷の棺に収められ、河に葬られたらどんなにいいだろう！」と水葬への憧れを述べ、「罗索河瘟疫」*7 では知恵おくれの息子を殺してその亡骸とともに河に身を投げる産婆の姿が描かれる。「向着白夜旅行」*8 では、主人公の再生の鍵となった魚潮のイメージを育んだ川が、同時に死者の霊魂を返すための川下りの川となる。つまり遅子建の中では、川は生と死の両方を司る存在あるいは場としてイメージされていると考えられる。

これら作品に描かれる川の生と死の円環のイメージは、遅子建の具体的な体験からもたらされたようだ。「サケは黒く大きな魚で、呼瑪河で大きくなるんだよ。でも気性が激しくてね、卵を産むとすぐに死んでしまうのさ」。「沉睡的大固其固」で祖母が少女に語るこのサケの物語に、遅子建幼少時の体験の反映を見ることができるだろう。サケは産卵のために川を遡上し産卵を終えると力尽きて死ぬ。そのとき生まれた卵も稚魚となり成魚となって再び死と引き替えに産卵する。毎年身近な川で繰り返されてきたこの営みが、遅子建に強いインパクトを与えたことは想像に難くない。捕った魚を守ろうとして命を落とした卡佳の死も、裏返せば産卵と引き替えに死してゆくサケの姿に重ねることができそうだ。

サケの産卵する姿が遅子建の心に深く刻まれたからこそ、彼女の中で魚が産む性としての女性に重ねられることになったのであろう。作品のところどころに女らしさと魚を結びつける描写が見られる。たとえば「逝川」では吉喜の生き生きした魅力を描くとき、魚を小気味よく食べる姿が描写される。「炉火依然」では魚売りがいつの間にか髪飾りのリボン売りになり、籠の魚は女らしさを顕示する艶やかなリボンにすり替わってしまう。

このように〈現実の魚〉のモティーフが、産む性である女性へと意味合いを広げた結果、もう一つの魚のモティーフである〈空想の魚〉を導き出すことになった。

4．〈空想の魚〉と展望

魚から女性へと意味合いを広げた〈現実の魚〉は、さらに女性一般から女性である主人公の私へとつながってゆき、魚は主人公の肉体的心理的反映になる。それらが主人公たちの心中に現れる〈空想の魚〉である。ただ、〈空想の魚〉を作品からあとづける限りでは、時間的に段階をふんだ形成は見られずむしろ散発的に現れ、後の作品より前の作品の方により抽象性の高い魚が描かれていたりする。おそらくこれは遅子建が以前から〈空想の魚〉のモティーフを持ちながらも、それを洗練された表現にする手段や場を持てず、モティーフが荒削りのまま書き込まれたからであろう。

とはいえ水面下で形を作りつつある〈空想の魚〉の断片を集めて繋ぎ合わせてみると、

最初のうちは、

彼女はチョウザメの夢を見ていた。小舟ほどの大きさで、十数人の漁民が一緒になってそれを岸に引き上げている。‥‥(中略)‥‥美奴はまだあのチョウザメのことを考えていた。岸に上げられ、もし雌なら、腹を割かれる運命にあるのではないだろうか。(岸)

などの記述に見られるよう、女性の在りようを魚に映していた。それがしだいに魚が女性である主人公に重なり、さらに主人公に比せられる魚のほうに自分自身を見る視点の逆転が生じる。「炉火依然」の主人公の恋人禾は、町を流れる河から捕った魚を魚売りから一匹買い、元の河に放す。彼のこの行為が主人公によって繰り返し回想されるのと対比するように、魚を持ち帰った町の人々の生気の無さと町という空間の息苦しさが叙述される。ここではむしろ河と魚の方が人間の豊かな生の姿であり、河から引き上げられた魚は生気と生きる場を失った人間の在り様を映しているかのようだ。

その後〈空想の魚〉は、登場人物の反映ではなく、より抽象的な存在に練り上げられていく。「岸上的美奴」では主人公美奴が、夢から覚めたときの感触を水の中から釣り上げられもがく魚のように感じ、夢と現実を水中と地上のようにとらえるが、これは魚のモティーフが現実から分離していく途上の表現としてあげることができよう。魚の泳ぐ水の中あるいは水辺と主人公の生活する地上、この二つが別々の空間として書き分けられ主人公の意識だけが行き来する。遅子建の〈空想の魚〉は『荘子』の「胡蝶の夢」に似た構造を持ち始めているようだ。最近の「九朶蝴蝶花」では、魚の夢と殺人事件に巻き込まれる現実とがくっきり分離して、双方の関連性が今まで以上に見えにくくなってきている。

遅子建の魚のモティーフの今後の展開は〈空想の魚〉の側にあるといえるだろう。しかし、創作現場において魚のモティーフは、夢と現実が交互に繰り返されるように〈現実の魚〉と〈空想の魚〉が入れ替わり立ち替わりこれからも現れてくると思われる。それは〈現実の魚〉の持つ意味合いが、遅子建にとっても読者にとっても魅力的で捨てがたいというだけではなく、〈現実の魚〉から分離した〈空想の魚〉が抽象性を増せば増すほど、再び〈現実の魚〉のモティーフが持つ大きな主題に逆方向から近づいているように思われるからである。

【付記】　本文中で省略された作品名：(沈)‥‥「沉睡的大固其固」　『北方文学』85-3
(逝)‥‥「逝川」　『収穫』　94-5
(岸)‥‥「岸上的美奴」　『鍾山』　95-2
(炉)‥‥「炉火依然」　『収穫』　90-5

(白)‥‥「白银那」　『大家』　95-2
(九)‥‥「九朵蝴蝶花」　『大家』　97-6
(魚)‥‥「鱼骨」　『山西文学』88-3
(原)‥‥「原始风景」　『人民文学』90-1.2
(懐)‥‥「怀想时节」　『鍾山』　90-4

【注釈】

*1　『山花』98-1。この中で戴錦華は二つの女性形象を提起している。一つは「娘＝夢見る少女」、もう一つは「女＝穏やかで豊かで我慢強い母親」。そしてこの二者に通い合う通路が存在しないために生じてくる葛藤を、幾つかのキーワードを使って提示してみせる。とはいえ、遅子建の作品世界を語るには紙面が足りず、言及される個々の作品の理解には異論もあるが、「遅子建の中では、死が生に浸透し、付随している」とする指摘は興味深い。

*2　遅子建の作品から感じ取れる北方性は、彼女が実際生活してきた黒竜江省西部がモデルとなっている。同省東部の「北大荒」を舞台にした小説群が注目された時、遅子建の小説もその中に含める動きがあったが、彼女はそれを否定している(宋学孟「关于迟子建」・『北方文学』86-9)。

*3　严鱼：「初春大迁徙」　『中国』86-9
　　鱼儿：「原始风景」　『人民文学』90.1-2
　　鱼纹：「朋友们来看雪吧」　『山花』98-1

*4　大固其固：「沉睡的大固其固」『北方文学』85-3
　　鱼塔镇：「原野上的羊群」　『大家』95-2

*5　以下、省略された作品名は【付記】を参照のこと。

*6　『収穫』89-4

*7　掲載誌不明、『白雪的墓园』と『遅子建文集』に収められている。

*8　『収穫』94-1

遅子建　著作目録(1985.1～1999.3)

■単行本

小说集：	北极村童话(中短)	作家出版社	1989年1月北京第1版	z
	茫茫前程(长)	上海文艺出版社	1992年	x
	向着白夜旅行(中短)	河北教育出版社	1995年 3月	y
	白雪的墓园(中短)	云南人民出版社	1998年 8月	w
	晨钟响彻黄昏(长)	沈阳出版社	1995年 3月	u
	〃	江苏文艺出版社	1997年10月	u
	逝川(中短)	长江文艺出版社	1996年 3月	p
	热鸟(长)	明天出版社	1997年	
	白银那(中短)	中国文学出版社	1998年 2月	q
散文集：	伤怀之美	云南人民出版社	1995年 8月	a
	听时光飞舞	江苏文艺出版社	1997年	b
	禁果叮当叩红尘	河北教育出版社	1997年	
文集：	迟子建文集(四卷)	江苏文艺出版社	1997年 7月	e
影记：	迟子建影记	河北教育出版社	1999年	

■雑誌掲載　〈 長篇 x　中篇 +　短篇 * 〉

※　掲載誌名だけのものは、遅子建の教示による

	那丢失的…… *	北方文学	85/1　〈デビュー作〉
zpe	沉睡的大固其固 *	北方文学	85/3(小说选刊　85/10)
	旧土地 *	北方文学	86/1
ze	北极村童话 +（1984.9 黑龙江塔河）	人民文学	86/2
z	在低洼处 *		
	没有月亮的抱月湾	小说林	86/2
z	初春大迁徙 +	中国	86/9
	小说三篇　z 苦婆 *	北方文学	86/9
	z 乞巧 *	〃	
	z 支客 *	〃	

z 吉亚大叔和他的墓场 * 北方文学 86/11

z 白雪国里的香枕 *（1984.12.14 加格达奇） 作家 87/3

zpe 北国一片苍茫 * 青年文学 87/7(小说选刊 87/11)

短篇三题 z 葫芦街头唱晚 * 北方文学 88/3(小说选刊 88/5)

z 西林小教堂 *（1987.11.26 西安）北方文学 88/3

z 到处人间烟火 *（1987.7.27） 〃

ze 鱼骨 * 山西文学 88/3

没有夏天了 +（1987.5.1 北京鲁迅文学院） 锺山 88/4

红罂粟小院 * 鸭绿江 88/6

w 无歌的憩园 * 北京文学 88/9

左面是篱笆右面是玫瑰 + 中外文学

海市 + 东北作家

奇寒 + 小说家

p 关于家园发展历史的一次浪漫追踪 *

羁鸟无期 * 时代文学 89/2

we 重温草莓 * 人民文学 89/2

小酒店初恋 + 莽原 89/3

we 遥渡相思 + 收获 89/4

小说三篇 * 花溪 89/10

青蛙的季节 * 青年文学 89/10

ype 原始风景 +（1989.12.2 改 北京十里堡） 人民文学 90/1-2

w 怀想时节 + 锺山 90/4

we 炉火依然 + 收获 90/5

花束 * 小说林 90/5

pe 麦穗 + 青年文学 90/6

荒草 * 河北文学 90/7

稻草人 * 北方文学 91/1

we 挤奶员失业的日子 *（1990.11.1 北京十里堡） 人民文学 91/1

wpe 白雪的墓园 * 春风 91/4(小说月报 91/6)

烟霞生卒年表 * 春风 91/4

xe 树下 x(1990.12.8 写毕 91.1.24 抄毕 北京·十里堡 91.7 改于哈尔滨)

<单行本收录时改题「茫茫前程」> 花城 91/6

w 在松鼠的故乡 *（1991.5.6 哈尔滨） 人民文学 91/7-8

we 从山上到山下的回忆 * 天津文学 91/8
铺天盖地的麻雀 * 东海 92/4
yeq 秧歌 +（1991.8 哈尔滨） 收获
ye 香坊 + 锺山
大树
ye 旧时代的磨房 + 小说家
we 罗索河瘟疫 *（1990.11）
w 月光下 *
w 银饰 *（1991.5.20 哈尔滨）
w 与水同行 * 天津文学 92/8
e 月光下的革命 * 天津文学 92/8
p 格局 + 鸭绿江 93/3
ye 东窗 +（1992.7 修 哈尔滨） 芙蓉 93/3
守灵人不说话 * 作家 93/3
we 不灭的家族 *（1992.11.6 哈尔滨） 芒种 93/4
ye 向着白夜旅行 +（1993 初秋 哈尔滨） 收获 94/1
we 回溯七侠镇 *（1993.5.23 哈尔滨） 大家 94/1
pe 盲人报摊 * 天津文学 94/1
we 音乐与画册里的生活 + 花城 94/3
pe 洋铁铺叮当响 + 青年文学 94/5
pe 逝川 * 收获 94/5
u 晨钟响彻黄昏 x（1993.12.31 初稿 1994.5.28 改毕 哈尔滨） 小说家 94/5
pe 庙中的长信 * 山花 94/12
eq 原野上的羊群 +（1994 年圣诞节前夜 哈尔滨） 大家 95/2
pe 岸上的美奴 + 锺山 95/2
飞天 + 江南 95/5
eq 亲亲土豆(二篇)* 作家 95/6(小说月报 95/8)
e 旅人 * 天津文学 95/8
岭上的风 * 山花 95/9
e 腊月宰猪 +（1995.2.16）
e 闹庵 *（1995.12.8 哈尔滨） 时代文学 96/2
eq 白银那 + 大家 96/2(小说月报 96/5)
eq 日落碗窑 + 中国作家 96/4(小说月报 96/10)

eq 银盘 +　　山花　96/6
eq 雾月牛栏 +　　收获　96/5
q 驼梁 *　　北京文学　97/5（小说月报　97/7）
逆行精灵 +　　锺山　97/3(小说月报　97/8)
热鸟 x　　百花洲　97/4
q 九朵蝴蝶花 +　　大家　97/6
朋友们来看雪吧 *　　山花　98/1(小说月报　98/3)
q 观彗记 +　　花城　98/1(小说月报　98/4)
清水洗尘 *　　青年文学　98/8(小说月报　98/10)
青草如歌的正午 *　　十月　99/2

■ 創作談

长歌当哭　　北方文学　86/9
人间至情　　中篇小说选刊　95/3
自觉与被动　　文学自由谈 48 期　95/3
追忆的结局　　小说月报　96/5
ab 必要的丧失(1995)　　当代作家评论
谁饮天河之水　　小说选刊
b 雪中的炉火　　〈逝川〉小说集跋

■ 対談

“天河之水”——迟子建访谈录　畅饮　花城　98/1
温情的力量　——迟子建访谈录　阿成,张英　作家　99/3

■ 散文

a 天鹅(1985 年)
a 空心含翠(1987 年)　　北方文学　87/6
a “蘑菇人”及其他(1987 年)
a 拾月光(1987 年)
a 座中泣下谁最多(1988 年 7 月 20 日于大兴安岭)
ab 遥远的境界(1988 年)
a 炒米胡同里面看夕阳(1988 年)
a 斯人独憔悴(1988 年)

a 总有慌张的时候(1989 年 1 月 14 日北京)

a 雪天音乐(1988 年)　　北方文学　89/7

a 海边的白房子(1989 年 8 月 5 日大兴安岭)

a 遐想片断(1989. 9. 3 北京)

a 保护文字(1989. 10. 2 北京)

a 昨日花束纷纷(1989 年)

ab 好时光悄悄溜走(1991 年)　　北方文学　91/12

ab 年年依旧的菜园(1991 年)

ab 灯祭(1992 年 3 月 4 日哈尔滨)

a 从东方到东方——访日札记(1992 年 3 月哈尔滨)

a 消逝的时光(1992 年 8 月 5 日深夜·哈尔滨)

a 童子庙的倒坍(1992 年阴历 7 月 14 夜哈尔滨)

a 为爱而告别(1992 年)

a 一间自己的屋子(1992 年)

a 把哭声放轻些(1992 年)

a 病中札记(1993. 9. 8 下午～1993. 9. 30 晚 9 时)

ab 猜想白夜(1993 年)

a 挂雪的树枝不垂泪(1993 年)

a 怦然心动的瞬间(1993 年)

ab 赐笔的"上帝"(1993 年)

ab 请接受残酷(1993 年)

ab 伤坏之美(1994 年)

ab 沧桑(1994 年)

a 十里堡的黄昏(1994 年)

a 鞭笞与践踏(1994 年)

a 与周瑜相遇(1994 年)

ab 阿央白(1994 年)

ab 悼三姨夫(1995 年)

ab 留名(1995 年)

ab 遗忘(1995 年)

ab 火灾(1995 年)

ab 冰灯(1995 年)

a 宁静的辉煌(1995 年)

ab 泥泞(1995年)

忧郁弥漫天庭	草原	97/4

ab 女人的手

a 哀蝶(1990年)？

晚风中眺望彼岸	花城	97/5
云烟过客	迟子建文集4附录	97/7
周庄遇痴	散文	97/12

b 撕日历的日子

b 一滴水可以活多久

b 火炉闲话

b 家常豆腐

b 编辑趣闻

b 闲话出租车

b 在银幕前

b 在雨中

b 死亡的气息

b 迷惘

b 桃李不言

b 木器时代

b 尽头

b 摆旧书摊的老伯

b 黄沙蔽天时

b 萤火一万年

b 钟声上海滩

b 随笔四则(蘑菇趣话，嘎仙洞随想，忧郁的树，长城断想)

b 暗夜飞霞

b 嫁给什么样的男人

b 与自己相遇

b 雷雨中的风情

b 一脉清流消逝

b 靠近人

b 我们的源头

b 自觉与被动

b 羞涩的夜谈

b 未来的岸

b 云淡好还乡

b 照妖镜

b 红颜读书郎

b 房屋杂谈

b 祭奠鱼群

b 听时光飞舞

b 岁月留痕

b 呼唤旧时代

■ 論評

让结局成为过去	北方文学 92/11
激情的背后	北方文学 94/6

■ 未発表

愿上帝降临平安之夜